



酒場の混沌が学びの場



しもだ・かげき

1940年、静岡県生まれ。探偵社、保険の調査員など20以上の職業を経験。80年「黄色い牙」で直木賞受賞。近年は子どもへの絵本の読み聞かせ運動に取り組んでいる。

作家

志茂田景樹さん

東京の面白さを味わったのは大学時代でした。武蔵野市の自宅から当時は駿河台(千代田区)にあった中央大まで、中央線で通学していました。その頃は東京がオリンピック開催に向けて大きく変わりつつあった。右肩上がりの経済状況も相まって、世の中に明るい雰囲気が出ていたし、東京は個性ある人たちが続々と集まる街でしたね。

高校時代に映画の世界にはまっていた、大学入学後に千駄ヶ谷(渋谷区)の俳優養成学校に入りました。すると映画のエキストラ出演のアルバイトが舞い込み、調布市の日活や大泉(練馬区)の東映など、映画会社の撮影所に通いました。

ある日、調布の撮影所の食堂で昼食を取っていると、数人の取り巻きを連れた男性が僕の近くに座ったんです。石原裕次郎さんでした。裕ちゃんはカレーライスの大盛りを注文すると、あの長い脚をテーブルに乗

つけて、たばこを吸い出した。全然行儀悪く見えなかったし、格好よくて見とれてしまっただけ。もちろん、声なんか掛けられませんでした。

もう一人、容姿にため息をついたのは岡田真澄さん。僕は少しモデルのアルバイトもしていました。どこかのホテルでブランド服の展示即売会があり、そこに岡田さんが仕事で来ていたんです。180センチ以上の長身に、エキゾチックなマスク……。2人ともこれまでの日本人とは大違い。

僕は俳優やモデルになれたら、と淡い望みを抱いていたのですが、こりゃあ無理だと納得したものです。



個人的だったのはスターだけではありません。

僕がしょっちゅう足を運んだのが、簡易宿泊所などが並ぶ通称「ドヤ街」にある立ち飲み屋

でした。山谷が有名ですが、それ以外にもありました。何かの映画の場面を見て興味を持ったのですが、その開放的な空気がすっかり気に入って、各地を訪れるようになりました。

急ピッチで開発が進む東京には、建設業関係の仕事に従事する日雇いの人が全国から集まっていました。景気もよかったから、そうした酒場も労働者でござった返し、にぎやかだった。僕はたいてい一人なのですが、作業姿の陽気なおじさんが「兄ちゃん、学生さんかい？ 一緒にどうや」と声をかけてきて、一杯、また一杯と、酌み交わしたこともたびたび。また、九州から出てきたというおじさんが「月が出た出た」なんて炭坑節を歌い出すこともありました。全く知らない人同士でもすぐに仲良くなり、身の上話をしたりもしましたね。

大学の授業にはあまり出席しなかったけれど、酒場が社会勉強の場でした。2年留年してやっと卒業し、その後は20以上の職を転々としました。でも「なんとかなるさ」と絶望せず、最終的に作家で食べていけるようになったのは、酒場にいるんならに会ったことが肥やしになっていると思います。



「ドヤ街」の酒場は、さまざまな人々が集まって混沌とした雰囲気も残っていました。そこで個性がぶつかって新しい文化や価値観が生まれていた。東京はそういう長所を持っていたと思うのです。

でも最近の東京はどうでしょう。そのような場所もなくな

こ近年、線路の高架化と駅前再開発が進み、街の個性が失われてしまいました。どの駅に降りても同じような居酒屋チェーン店があったり。個性が失われると面白みに欠けるし、なんだか心まで閉塞感ひさきに覆われているような気さえます。

ったし、街の景色も均一化しました。庶民の心の余裕も次第に失われているようです。

僕は今もJR中央線沿線に住んでいます。残念なことに、こ

しました。お茶の間からは「変な人だな」と思われていたようですが、あの時代の東京が僕の個性を育ててくれたと感じます。混沌とした開放感が時々とても恋しくなります。

2020年の東京五輪はそう遠くない未来ですが、かつて東京にあった個性を大事にする雰囲気きんぎがもう一度広がっていくといいですね。【聞き手・江畑佳明、写真・猪飼健史】